

Once upon a time in Utsunomiya

一枚の絵葉書から 石井敏夫コレクションより

第61回

エノ、ガキ店星野屋 其の二

昭和初期の大通り。右端の洋風三階建てが
星野屋エノガキ店



THE BUSY MAIN STREET, UTSUNOMIYA. 写真大角中村の敏夫石井 (東京市立印書)

明治期から大正期にかけて作られた絵葉書は、コロタイプ印刷が用いられていた。この印刷方式は、約百五十年前にフランスで生まれた技術で、資料「コロタイプの製版と印刷の実際」(山口須美)を要約すれば、「ガラス版を刷版に使用することから、かつては『瑠璃版』と呼ばれ、撮影・製版・印刷と大変手間のかかるものだった。しかし、連続階調による滑らかで深みのある質感や印刷に和・洋紙を選ばない特製や耐久性の高いインキとの融合によつてできる、印刷表現は他に勝

るものだった」。

日本にコロタイプ印刷が導入されたのは、一八八三(明治十六)年内閣印刷局が始めといわれ、一八八九(明治二十二年)には、東京深川で東京印刷会社が創業した。星野屋商店が明治後期にこれら機材一式と技術力をもつて、自前の絵葉書印刷工場を宇都宮に設立したことは、時代の最先端を担っていた証左に違いない。

また、当時の彩色(カラー)絵葉書は、墨刷りの絵葉書に、人工的に一枚一枚手彩色したもので、大正期にはいと大量生産ができるオフセット印刷に代わっていった。彩色絵葉書は、関東大震災で終焉を迎えたといわれる。

柏田長七は、一九二九(昭和四)年に日光町下鉢石に星野屋分店と日の丸写真館を設立。日光を中心に中禅寺湖、湯元、鬼怒川温泉方面に機材を背負い、自転車、リヤカーで撮影に出かけている。一九三五(昭和十)年には、和英訳『国立公園 日光の展望』を出版。ちなみにその一部を紹介



中禅寺湖に浮かぶ帆船(オフセット印刷)

介してみる。「今の日光見物はスピードに恵まれている。参道はバスに乗って……快適な速度で飛ばし……そして訪ね行く先々の面白さ愉快さ。金谷ホテルから望めば山麓の彼方に帯一筋、大谷川の清流が白く光る。遙かに聳ゆる群峰は朝霧に模糊たり」。小書は日光の魅力を余すことなく紹介した今という写真ガイドで、その迫力を見る者を唸らせる。

長七はその五年後、一九四〇(昭和十五年)年八月二十五日、肺結核を患い他界。五十五歳の若さでこの世を去った。当時、使用していた機材、フィルムとも宇都宮空襲ですべて壊滅。残念ながら現存する物は何もない。